



ソフィー・パチーニ ◆ピアノ アルゲリッチを彷彿させる 自然体の天才

発売されたばかりのCDが「*Klassik*」や「*Trendcharts*」において、ネットレボコ、カウフマンに次ぐ3位という快挙を成しても、ソフィー・パチーニは潔いほど自然体だ。2012年の来日時に、その人柄を感じ取った読者もいると思うが、どこにもブレない成熟した人間性と確実な技巧に加え、音楽への強い信念が感じられる彼女は、マルタ・アルゲリッチと特別な友情で結ばれている。

2006年、14歳のパチーニは自分の録音をアルゲリッチに手渡し、運命を感じたという。そして2010年、偶然訪れたイタリアの街でアルゲリッチのコンサートがあると知って、父親と3時間待ちぶせして演奏を聴いてもらった。最初は不機嫌な様子だったアルゲリッチだったが、演奏後には抱きしめられてキスをされたという。その後、ルガーノ音楽祭で弾くチャンスももらい、家に泊まりに来るほどの友情が始まった。

今回のCDでは、その時にも弾いたリストに焦点を当て、「超絶技巧ばかりが目されるリストの弁護士気取りで」リストの音楽の深さを表現したいと願い、リストにとって「音楽的父親のようなベートーヴェン」も収録したという。ベートーヴェンとリストの関係にアルゲリッチとパチーニが重なる。録音に際して、ピアノに座った端にアルゲリッチからの激励メッセージが届き、側にいるような気分で弾いたと語る。

センテホールでの輝かしい音が特にベートーヴェンに合っているが、ワーグナー（リスト編「タンホイザー」序曲）などオーケストラの編曲には、適した音を数回探し、「オーケストラ版と競うのではなく、ピアノ独自の新しいアプローチ」を目指した。特にリスト《ドン・ジョヴァンニの回想》では、パチーニに流れるイタリアの血が

歌い、オペラを観ている気分させる。ピアノを習い始めたのもイタリア人の父親の夢で、ドイツ人の母が医者になって初めての給料で当時4歳の娘にピアノを買い与えたからだというが、8歳で試みに受けたスタインウェイ・コンクールで優勝し、ザルツブルクのモーツァルテウム音楽大学でカール・ハインツ・ケメリングに師事することになる。

音楽家の家庭出身でない視点から、「親善大使として」コンサートでは自分で解説し、プログラムに曲目紹介を書く。調性の持つ意味に関する博士論文も執筆中だという。「ピアノが親友で、音楽を通して自分の性格が形成された」と語る彼女は、凄い事を成し遂げそうだ。

（中東生）



■CD
ベートーヴェン/リスト:ピアノ作品集
〈演奏〉ソフィー・パチーニ (p) (曲目)
ベートーヴェン「ピアノ・ソナタ第21番(ワルトシュタイン)」, リスト
《コンソレーション》No.1&No.2,
ワーグナー(リスト編)「(タンホイザー)序曲」、リスト《ドン・ジョヴァンニの回想》, リスト《愛の夢第3番》, リスト《ハンガリー狂詩曲第6番》
[海外盤]

